



元氣とタイムリーな情報を提供する

五十嵐レポート

発行:「町コン」五十嵐 勉

2023年10月10日 第1137号「週刊五十嵐レポート」

戦わずして勝つ

雑誌「致知」11月号の「企業繁栄の道」というテーマで南薩食鳥(鹿児島)の徳満義弘社長と坂東太郎(茨城)の青谷洋治会長が対談。お互いが共通していることは「孫子の兵法」の「戦わずして勝つ」を重視している。

青谷氏は、「小が大に勝つ方法は、大手とは戦わない、その土俵に入らない方法でずっと外食産業の中でやってきた。大手とはまともにやったら勝てるはずない。同じ地域で大手が一番いい立地だったら、そこから離れて二番手、三番手の立地に出店。概ね安めの価格を設定する大手に惑わされず、自分たちの価格を維持、独自路線を貫く。価格で勝負するのではなく、良質な食材、調理やサービスに手間暇をかけ、徹底してこだわる。大手で人気のある商品を真似しない」。

徳満氏は、「食肉加工業界の大手と戦っても敵わない。まず戦わないことが基本。大手が魅力としない、得意としない、そういう市場を創り上げていくことを細々とした歩みながらも心掛けた。取り組みの一つが、種鳥をチルドで輸送するもの。冷凍で流通するのが常識だったものをリスクをとって挑戦。リスクにはチャンスでありメリットと捉える」。

帝国データバンクによる業績の推移。(単位:百万円)

坂東	19/12	20/12	21/12	22/12		19/12	20/12	21/12	22/12
売上	9,152	7,667	7,293	8,229	純利益	243	▲67	420	35
南薩	20/3	21/3	22/3	23/3		20/3	21/3	22/3	23/3
売上	4,924	4,826	4,964	5,126	純利益	26	26	39	27
自己資本比率	坂東太郎	52%	南薩摩食鳥	21%					

コロナ禍の影響もあり、この数字だけでは明確な事は言えない。坂東太郎の20/12期はコロナ禍の影響で赤字、21/3期は支援金で大幅黒字、22/12期は支援金打ち切りで低収益になったと推測できる。自己資本52%は立派。南薩食鳥は思ったほど純利益がないし、自己資本比率も21%と低い。業界の厳しさを感じる。生き残るには、大手と戦わず、自分の土俵を作ることが肝要。

ちょっと
気になる出来事

10月2日付朝日新聞、「企業の生産性こそ上げねば」というコラム(デービッド・アトキンソン氏)。

日本で給料が上がらない一番の理由は生産性にある。韓国の平均年収は日本の1.2倍。生産性も1.1倍。生産性を上げると給料が上がる。生産性は毎年のちょっとした改善。この30年間、海外の主要国は横ばいの日本を尻目に、毎年1%程度のイノベーションを確実に積み重ね、生産性を高めて給料を上げている。

日本では大企業の実産性は先進国とあまり変わらないが、中小企業の実産性が低い。大企業に対する中小企業の実産性が欧米では約7割だが、日本は5割。日本人の7割が働く中小企業の実産性が低いので、全体の賃金が低い。

10月6日付日経新聞、「最賃1000円の宿題(下)」 「低収益企業、迫る淘汰」という記事。コスト上昇分の価格転嫁率は44%。13%は全く転嫁できないと。価格転嫁できない企業は最低賃金の上げに対応できないと。

キーワードは「生産性」と「価格転嫁(力)」。



一口メモ
知識

大器晩成

天の衢(ちまた)をになう。亨(とお)る。

「衢(ちまた)」とは十字路。「天の衢をになう」とは、四通八達(しつうはったつ)、広大無辺な天の十字路をその背に負うこと。

つまり、蓄積したものの完成を意味し、縦横自在に大きな働きを為すことを表している。

能力を縦横自在に発揮できるのは、大きな蓄積があればこそ。天才は努力によって引き出されるのである。

大器は晩成す。困難や挫折を幾度も乗り越え、大きな力を蓄えることで、本来持つ無限の飛躍の時を迎えることができる。

「易経一日一言」(致知出版/竹村亜希子)より

- 「戦略社長塾東京」小岩校 毎週日曜日・水曜日 午前10時~12時
- 「戦略社長塾東京」銀座校、武蔵村山校、豊岡校 開講中。

㈱五十嵐コンサルティングオフィス 〒133-0051東京都江戸川区北小岩6-21-5
TEL03-3659-7703 Fax03-3659-7077 info@igarashireport.com

